

エレミヤ書について —そのヘブライ語聖書とギリシャ語聖書の構成、及び「預言者」という語彙—

ナザレ研修会第 24 回

ナザレ修女会 小林進
2018 年 4 月 7 日 (休講) / 7 月 7 日

今回のお話のポイント

- ① ヘブライ語のエレミヤ書とギリシャ語のエレミヤ書の構成が異なるという点
含意：われわれが現在手にするヘブライ語のエレミヤ書と、(おそらく) 紀元前 (三世紀以後) にギリシャ語に翻訳した人々が持っていたヘブライ語のエレミヤ書は、同じヘブライ語のエレミヤ書でありながら、実態は異なる版であった (可能性が強い)。旧約聖書の伝播と保存が、地方 (locales) によって異なり、決して一枚岩 (monolithic) ではなかったことを示す。
- ② ヘブライ語の旧約聖書 (記号は MT; マソラ・テキスト Masora Text と言う) とギリシャ語の旧約聖書 (記号は LXX; [独]セプトゥアギンタ Septuaginta, [英]セプトゥアジンツ Septuagint, [仏]セプタント (Septante または traduction des Septante) のエレミヤ書を比較することと、エレミヤ書における「預言者」という語彙の使用評価がことなる。
- ③ セム語の一つで、南方カナン語に属するヘブライ語が、ギリシャ語というインド=ヨーロッパ語の一つに翻訳されたという事実。
- ④ 分かっていることは、しかし、ヘブライ語聖書とギリシャ語聖書とを比較するだけで問題は済むのか。ラテン語聖書 (記号は VL; ヴルガタ Vulgata) を参照することなしに、へとギはそれだけで比較の問題が解決するのか (今回は、この問題に触れず)。

エレミヤ書の [へ] と [ギ] の構成概略

*ギリシャ語旧約聖書は、何らかのヘブライ語旧約聖書を目の前に置いて翻訳したのであるが、「翻訳」という行為には必ず「解釈」という要素が付きまとい、ギリシャ語旧約聖書はヘブライ語旧約聖書を「翻訳」と同時に「解釈」したとすることが出来る。今回わたしは、大部分は、『新共同訳聖書』に従っているのだから、わたし自身による「翻訳」と「解釈」は必要以外極力避け、ギリシャ語旧約聖書のギリシャ語を新共同訳聖書と比較、吟味するにとどまった。そういう意味では、わたしが今回ここで書いているレジュメは 18 世紀以後の philology、「文献学」であり、やや古い言い方をすれば、言語学 (linguistics) の範疇に収まるとともに、単純にヘブライ語とギリシャ語を比較した「歴史言語学」(historical linguistics) の範疇を出ない。

*[へ]と[ギ]の相違のなかで、人称代名詞の相違に着目することが重要だと考えた場合 (たとえば、[へ]は「お前」という代名詞を使用しているのに、[ギ]は「彼は」というような場合には) それをしてきたが、重要でないと思ったときは、邦語で理解する際に文法的には無視してもよいと判断した。その他接続詞など。

また、七十人訳聖書のギリシャ語に特化した専門の辞書が、ギリシャ語に対応するヘブライ語を見つけ出すことが出来ないとは判断したときはことさらに皆さんの注意を引くことをしなかった。

エレミヤ書の章 (節) に関するギリシャ語とヘブライ語の順序

Griechische und hebräische Reihenfolge¹⁾ der Kapitel des Ier.-Buches

LXX	ⲙ	ⲙ	LXX
11-25 ¹³	11-25 ¹³	30 ⁶⁻¹¹	49 ²⁸⁻³³
25 ¹⁴⁻²⁶	49 ³⁴⁻³⁹	30 ¹²⁻¹⁶	49 ²³⁻²⁷
26	46	31	48
27	50	32 ¹⁻²⁴	25 ¹⁵⁻³⁸
28	51	33	26
29 ¹⁻⁷	47 ¹⁻⁷	34	27
29 ⁸⁻²³	49 ⁷⁻²²	35	28
30 ¹⁻⁵	49 ¹⁻⁶	36	29

37	30	32	39
38	31	33	40
39	32	34	41
40	33	35	42
41	34	36	43
42	35	37	44
43	36	38	45
44	37	39	46
45	38	40	47
46	39	41	48
47	40	42	49
48	41	43	50
49	42	44 ¹⁻³⁰	51 ¹⁻³⁰
50	43	45 ¹⁻⁵	51 ³¹⁻³⁵
51 ¹⁻³⁰	44 ¹⁻³⁰	46	26
51 ³¹⁻³⁵	45 ¹⁻⁵	47 ¹⁻⁷	29 ¹⁻⁷
52	52	48	31
11-25 ¹³	11-25 ¹³	49 ¹⁻⁶	30 ¹⁻⁵
25 ¹⁵⁻³⁸	32 ¹⁻²⁴	49 ⁷⁻²²	29 ⁸⁻²³
26	33	49 ²³⁻²⁷	30 ¹²⁻¹⁶
27	34	49 ²⁸⁻³³	30 ⁶⁻¹¹
28	35	49 ³⁴⁻³⁹	25 ¹⁴⁻²⁶ ¹
29	36	50	27
30	37	51	28
31	38	52	52

¹⁾ Die hebräische Reihenfolge haben die Hss. Der hexaplarischen und lukianischen Rezension.

ヘブライ語の順序は、(オリゲネスの)『六書対照版』と『ルキアヌス写本』による

ヘブライ語聖書

ギリシャ語聖書

1-25章 自分の民に対する預言	1-25章 13節までは[へ]と基本は同じ。 しかし、25章 14節-19節、26章 1節 はエラムへの託宣で、それは[へ]49章 34-39節に対応する
26-45章 エレミヤに関する物語	26-31章(または32章)まで諸国民への 託宣
26章 神殿におけるエレミヤの説教、 預言者ウリヤの死	[へ]の46章 諸国民への託宣、エジプ トへの託宣に対応 (*26章 2-28節)
27章 軛の預言	[へ]の50章 バビロンへの託宣に対応
28章 ハナンヤとの対決	[へ]の51章 バビロンへの託宣に対応
29章 エレミヤの手紙、シェマヤに対する審判	[へ]の47章 1-7 (ペリシテ人への託宣) に29章 1-7節が対応 [へ]の49章 7-22節(エドムへの託宣) に29章 8-22節が対応
30章 回復の約束	[へ]の49章 1-5節 (アンモンへの託 宣)に30章 1-5節が対応し、 [へ]の49章 28-33節 (ケダル・ハツ

- オルへの託宣) に 30 章 6-11 節が対応し
 [へ] の 49 章 23-27 節 (ダマスコへの託宣) に 30 章 12-16 節が対応する
- 31 章 新しい契約 [へ] の 48 章 1-44 節 (モアブへの託宣) に 31 章 1-44 節が対応。但し [へ] 45-47 節を欠く
- 32 章 エレミヤの拘留、アナトテの畑の購入、エレミヤの祈り [へ] の 25 章 15-38 節 (バビロンの王ネブカドレツアルによる諸国身への攻撃) に 32 章 1-24 節が対応

***33 章からエレミヤに関する物語に変わる**

- 33 章 エルサレムの復興 [へ] の 26 章 1-24 節 (神殿におけるエレミヤの説教、預言者ウリヤの死) が対応
- 34 章 ゼデキヤ王への警告、奴隷の解放 [へ] の 27 章 2-22 節 (輓の預言) に対応。但し [へ] の 1 節、7 節、13 節を欠く
- 35 章 レカブ人の忠誠 [へ] の 28 章 1-17 節 (ハナンヤとの対決) に対応
- 36 章 預言の巻物 [へ] の 29 章 1-32 節 (エレミヤの手紙、シエマヤに対する審判) に対応
- 37 章 エレミヤの逮捕 [へ] の 30 章 1-24 節 (回復の約束) が対応
- 38 章 水溜に投げ込まれる、ゼデキヤ王との最後の会見 [へ] の 31 章 1-40 節 (新しい契約) に対応
- 39 章 エルサレムの陥落、エベド・メレクへの約束 [へ] の 32 章 1-44 節 (エレミヤの拘留、アナトテの畑の購入、エレミヤの祈り) に対応
- 40 章 エレミヤの釈放、ゲダルヤの働き [へ] の 33 章 1-13 節 (エルサレムの復興) にみに対応。[へ] の 33 章 14-25 節はここでは欠落しており、その他の [ギ] のどこにも見られない*
- 41 章 ゲダルヤの働き、続き [へ] の 34 章 1-22 節 (ゼデキヤ王への警告、奴隷の解放) が対応
- 42 章 エジプト行きに対する警告 [へ] の 35 章 1-9 節 (レカブ人の忠誠) が対応
- 43 章 エジプトへの逃亡、エジプトにおける預言 [へ] の 36 章 1-32 節 (巻物の預言) に対応
- 44 章 エジプトにおける預言、続き [へ] の 37 章 1-21 節 (エレミヤの逮捕) に対応
- 45 章 ベルクへの言葉 [へ] の 38 章 1-28 節 (水溜に投げ込まれる、ゼデキヤ王との最後の会見) に対応
- 46-51 章 諸国民に対する預言**
- 46 章 諸国民への託宣、エジプトへの託宣 [へ] の 39 章 1-3 節 (エルサレムの陥

	落の一部) と 14-18 節 (エルサレムの陥落の一部) に対応。4-13 節を欠く*
47 章 ペリシテ人への託宣	[へ] の 40 章 1-16 節 (エレミヤの釈放ゲダルヤの暗殺) に対応
48 章 モアブへの託宣	[へ] の 41 章 1-18 節 (ゲダルヤの暗殺) に対応
49 章 アンモン人への託宣、エドムへの託宣、 ダマスコへの託宣、ゲダル・ハツォルへの 託宣、エラムへの託宣	[へ] の 42 章 1-22 節 (エジプト行きに 対する警告) に対応
50 章 バビロンへの託宣	[へ] の 43 章 1-13 節 (エジプトへの逃 亡、エジプトにおける預言) に対応
51 章 バビロンへの託宣、バビロン滅亡の巻物	[へ] の 44 章 1-30 節 (エジプトにおけ る預言) に対応 [へ] の 45 章 1-5 節 (バルクへの言葉) に対応
52 章 歴史的補遺 = 王下 24 章 18 節-25 章 21 節	
52 章 エルサレムの陥落と捕囚、ヨヤキン王の 名誉回復	[へ] の 52 章 1-34 節 (エルサレムの陥 落と捕囚、ヨヤキン王の名誉回復) に 対応

1 章「エレミヤレの言葉」という表現
2 章

18 節へブ語本文に対し

19 節「万軍の主なる神は言われる」一回
22 節「主なる神は言われる」
28 節「お前の神々は」以下

26 章
1 節「預言者エレミヤに臨んだ諸国民に対する
主の言葉」

以下省略

1 章「神の言葉」という表現

2 章 1 節と 2 節前半が欠け、2 節後
半から始まる
18 節「あなたがわたしを捨てたの
で、わたしはこれをしなかった」
と主は言われる (短い!)
19 節二回「主なる神は言われる」
22 節「主は言われる」
28 節「わたしがエルサレムを歩く
たびに、彼らはバアルに捧げもの
をする」(私訳)

26 章
1 節に対応する節なし。2 節から

へブライ語 47 章 1-7 節 (ペリシテ人)、49 章 7-22 節 (エドム) とギリシャ語 29 章 1-7 (ペリシテ人)、29 章 8-23 節 (エドム=30 章 1-16 節) をテスト・ケースにして

*上記ギリシャ語の章節区分は Joseph Ziegler の版、SEPTUAGINTA. VETUS TESTAMENTUM GRAECUM、XV, edidit Joseph Ziegler, (Göttingen, 1976)による。他方、括弧で記した (30 章 1-16 エドム) の章節区分は Alfred Rahlfs の版、SEPTUAGINTA. Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes, edidit Alfred Rahlfs, Vol. II, (Stuttgart, 1935) による。両者の版の間には章節の区分で相違がある。因みに、Alfred Rahlfs の版の脚注には、へブライ語聖書との対応に関する次のような記述がある。その示すところは、Alfred Rahlfs の版においては、30 章の構成に関しては、へブライ語聖書のアンモン (= M 49-1-6)、エドム (=M 7-22; 17-22)、ダマスコ (M 23-28: 28-33; 29-33) が一緒になっていますよ、ということを示している。

30 (=M 49;1-6= M 7-22; 17-22= M 1-6;23-28= M 28-33;29-33= M 23-27)

ヘブライ語聖書

47章 1-7節 ペリシテ人への託宣

1節 「預言者エレミヤに臨んだ主の言葉。ファラオがガザを撃つ前にペリシテ人に向かって」

2節 異同なし

3節 [直訳]: 強い蹄の踏む音
その戦車の地響き、その車輪の轟音
父親は子どもを顧みず
自分の手の弱さゆえ

4節 ペリシテ人をすべて滅ぼす日が来る
ティルスとシドン^を絶ち、援軍の残りの者も
主はペリシテ人を滅ぼし、カフトル、残りの者も

5節 ガザでは頭をそり落とし、アシュケロンは滅びる
谷に残る者、いつまで身を傷つけるのか

6節 災いだ、主が剣を取られた
いつまでお前は静かにならないのか
お前の鞆に退き、鎮まって沈黙せよ

7節 何処でお前は休むのか
主は剣 ([へ]それ) に命じて、アシュケロンと
海辺の海岸に
そこにそれを ([へ]剣) 仕向ける

ギリシャ語聖書

29章 1-7節ペリシテ人への託宣

1節 「ペリシテ人について」
但し、1514-17年に出版された The Complutensian Polyglot には[へ]と同じ表現が見られる

2節 異同なし

その勢いの音
その足の武具、その戦車の地響き)
父親は子どもを顧みず
自分の手の弱さゆえ

ペリシテ人をすべて滅ぼす日が来る
ティルスとシドン^を絶ち、その助けを
求めるすべての残りの者も
主は島々の残りの者を滅ぼす

ガザでは頭をそり落とし、アシュケロンは滅びる
アナク人の残りの者よ、いつまで身を傷つけるのか

剣はいつまでなのか、主の災いだ
いつまでお前は静かにならないのか
お前の鞆に戻り、休んで沈黙せよ

どうして彼は休むのか
主は剣 ([ギ]それ) に命じて、アシュケロンと島々に
残りの者たちに仕向ける

ギリシャ語のペリシテ人への託宣 [ギ]29章 1-7節

1節 Ἐπὶ τοὺς ἄλλοφύλους.
ついて ペリシテ人に

2節 Τάδε λέγει κύριος / Ἴδου ὕδατα ἀναβαίνει ἀπὸ βορρᾶ
このように 言われる 主は 見よ、水が 沸き上がり から 北
καὶ ἔσται εἰς χειμάρρου κατακλύζοντα καὶ κατακλύσει γῆν καὶ τὸ πλήρωμα αὐτῆς,
(そして) 川となって 押し寄せ (そして) 押し流す 地と 満ちるもの そこに
πόλιν καὶ τοὺς κατοικοῦντας ἐν αὐτῇ / καὶ κεκράζονται οἱ ἄνθρωποι,
町 と 住むもの その中に (そして) 叫び 男たちは
καὶ ἀλαλάξουσιν ἅπαντες οἱ κατοικοῦντες τὴν γῆν.
(そして) 悲鳴を上げる 皆 住むもの 地に

3節 ἀπὸ φωνῆς ὀρμῆς αὐτοῦ, / ἀπὸ τῶν ὀπλῶν τῶν ποδῶν αὐτοῦ
から 音 勢いの その から 武具 足の その
καὶ ἀπὸ σειμοῦ τῶν ἁρμάτων αὐτοῦ,
(そして) から 地響き 戦車の その
ἤχου τροχῶν αὐτοῦ οὐκ ἐπέστρεψαν πατέρες ἐφ' υἱοὺς αὐτῶν
*音 車輪の その ない 顧み 父親は を 息子 自分の
ἀπὸ ἐκλύσεως χειρῶν αὐτῶν
から 弱さ 手の 自分の

*最初の ἀπὸ はMTの註によれば 2節と4節に懸かる。「~のため」の意か

4節 ἐν τῇ ἡμέρᾳ τῇ ἐρχομένῃ τοῦ ἀπολέσαι πάντας τοὺς ἄλλοφύλους.
に 日 来る 滅ぼす すべて ペリシテ人を

καὶ ἀφανιῶ τὴν Τύρον καὶ τὴν Σιδῶνα καὶ πάντας τοὺς καταλοίπους τῆς βοηθείας
そして (私は?)絶つティルス とシドン^を そして すべての 残りの者を 助けを求める
αὐτῶν, ὅτι ἐξολεθρεύσει κύριος τοὺς καταλοίπους τῶν νήσων.
その から 滅ぼす 主は 残りの者を 島々の

5節 ἥκει φαλάκρωμα ἐπὶ Γάζαν, ἀπερρίφη Ἀσκαλὼν καὶ οἱ κατάλοιποι Ἐνακίμ.
来る (=となる) はげ では ガザ滅びるアシュケロンは そして 残りの者は アナク人の

ἕως τίνος κόψεις,
 まで いつ 身を傷つけるのか
 6 節 ἕως τίνος κοψεις, ἢ μάχαιρα τοῦ κυρίου; ἕως τίνος οὐκ ἡουχάσεις;
 いつまで なのか 剣は 災いだ 主の いつまで なのか ならないのは お前は静かに
ἀποκατάστηθι εἰς τὸν κολεόν σου, ἀνάπαυσαι καὶ ἐπάρογητι.
 もとに戻り に 鞘に お前の お前は休み そして 沈黙せよ
 7 節 πῶς ἡουχάσεις; καὶ κύριος ἐνετείλατο αὐτῇ ἐπὶ τὴν Ἀσκαλῶνα
 どうして かれは休むのか (そして) 主は 命じて それに (= 剣) に アシケロン
καὶ ἐπὶ τὰς παραθαλασσίους,
 と に 島々
ἐπὶ τὰς καταλοίπους, ἐπεγερθῆναι.
 に 残りの者たち

エドムへの託宣 [ギ]29章8-23節 以下、ギリシャ語のみで、邦訳なし

8 節(=30章1節) Τῇ Ἰδουμαίᾳ. Τάδε λέγει κύριος Οὐκ ἔστιν ἔτι σοφία ἐν Θαίμαν, ἀπόλετο
βουλή ἐκ οὐνεκῶν, ὄχετο σοφία αὐτῶν,
 9 節(=30章2節) ἠπατήθη ὁ τόπος αὐτῶν. βαθύνετε εἰς κάθισιν, οἱ κατοικοῦντες ἐν Δαιδαν, ὅτι
δύσκολα ἐποίησεν ἡγάγον ἐπ' αὐτὸν ἐν χρόνῳ, ᾧ ἐπεσκεπάμην ἐπ' αὐτόν.
 10 節(=30章3節) ὅτι τρυγηταὶ ἦλθόν σοι, οὐ καταλείψουσίν σοι καταλείμματα ὡς κλείπται ἐν
νυκτὶ ἐπιθήσουσιν χεῖρα αὐτῶν.
 11 節(=30章4節) ὅτι ἐγὼ κατέουρα τὸν Ησάυ, ἀνεκάλυψα τὰ κρυπτὰ αὐτῶν, κρυβῆναι οὐ μὴ
δύνωνται ὄλοντο διὰ χεῖρα ἀδελφοῦ αὐτοῦ καὶ γείτονος αὐτοῦ, καὶ οὐκ ἔστιν
 12 節(=30章5節) ὑπολείπεσθαι ὄρφανόν σου, ἵνα ζήσῃται καὶ ἐγὼ ζήσομαι, καὶ χῆραι ἐπ' ἐμέ
πειοῖθαι.
 13 節(=30章6節) ὅτι τάδε εἶπεν κύριος Οἷς οὐκ ἦν νόμος πεῖν τὸ ποτήριον, ἔπιον καὶ οὐ
ἀθωωμένη οὐ μὴ ἀθωωθῆς, ὅτι πίνων πίεσαι.
 14 節(=30章7節) ὅτι κατ' ἐμαυτοῦ ὡμοσα, λέγει κύριος, ὅτι εἰς ἄβατον καὶ εἰς ὄνειδισμὸν καὶ εἰς
κατάρσιν ἔση ἐν μέσῳ αὐτῆς, καὶ πᾶσαι αἱ πόλεις αὐτῆς ἔσονται ἔρημοι εἰς αἰῶνα.
 15 節(=30章8節) ἀκοὴν ἤκουσα παρὰ κυρίου, καὶ ἀγγέλους εἰς ἔθνη ἀπέστειλεν Συναχθῆτε καὶ
παραγένεσθε εἰς αὐτήν, ἀνάστητε εἰς πόλεμον.
 16 節(=30章9節) μικρὸν ἔδωκά σε ἐν ἔθνεσιν, εὐκαταφρόνητον ἐν ἀνθρώποις.
 17 節(=30章10節) Verse: 10 ἡ παιγνία σου ἐνεχείρησέν σοι, ἰταμία καρδίας σου κατέλυσεν
τρυμαλιὰς πετρῶν, συνέλαβεν ἰσχὺν βουνοῦ ὑψηλοῦ ὅτι ὑψώσεν ὡπερ ἀετὸς νοσοῖάν αὐτοῦ,
ἐκείθεν καθελῶ σε.
 18 節(=30章11節) καὶ ἔσαι ἡ Ἰδουμαία εἰς ἄβατον, πᾶς ὁ παραπορευόμενος ἐπ' αὐτήν συριεῖ.
 19 節(=30章12節) ὡπερ κατεστράφη Σοδομα καὶ Γομορρα καὶ αἱ πάροικοι αὐτῆς, εἶπεν κύριος
παντοκράτωρ, οὐ μὴ καθίσῃ ἐκεῖ ἄνθρωπος, καὶ οὐ μὴ ἐνοικήσῃ ἐκεῖ υἱὸς ἀνθρώπου.
 20 節(=30章13節) ἰδοὺ ὡπερ λέων ἀναβήσεται ἐκ μέσου τοῦ Ἰορδάνου εἰς τόπον Αἰθαμ, ὅτι
ταχὺ ἐκδιώξω αὐτοὺς ἀπ' αὐτῆς καὶ τοὺς νεανίσκους ἐπ' αὐτήν ἐπιστήσατε. ὅτι τίς ὡπερ ἐγώ; καὶ
τίς ἀντιστήσεται μοι; καὶ τίς οὗτος ποιμὴν, ὃς στήσεται κατὰ πρόσωπόν μου;
 21 節(=30章14節) διὰ τοῦτο ἀκούσατε βουλήν κυρίου, ἣν ἐβουλεύσατο ἐπὶ τὴν Ἰδουμαίαν, καὶ
λογισμὸν αὐτοῦ, ὃν ἐλογίσατο ἐπὶ τοὺς κατοικοῦντας Θαίμαν Ἐὰν μὴ συμψησῶσιν τὰ ἐλάχιστα
τῶν προβάτων, ἐὰν μὴ ἀβατωθῇ ἐπ' αὐτήν κατάλυσιν αὐτῶν.
 22 節(=30章15節) ὅτι ἀπὸ φωνῆς πτώσεως αὐτῶν ἐσεισθῆ ἡ γῆ, καὶ κραυγὴ σου ἐν θαλάσῃ
ἠκούσθη.
 23 節(=30章16節) ἰδοὺ ὡπερ ἀετὸς ὄψεται καὶ ἐκτενεῖ τὰς πτέρυγας ἐπ' ὄχυράματα αὐτῆς καὶ
ἔσαι ἡ καρδία τῶν ἰσχυρῶν τῆς Ἰδουμαίας ἐν τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ ὡς καρδία γυναικὸς ὄδινούσης.

「預言者」・「預言する」という言葉に否定的な表現

- 2章8節「預言者たちはバアルによって預言し」名詞・動詞 וְהַנְבִיאִים נְבִיאֵי בַעַל ([ギ]2章8節も同様 καὶ οἱ προφήται ἐπροφήτευσον τῇ Βααλ)「祭司たち・指導者たち・律法を教える人々・指導者たち (=牧者)・預言者たち」
- 2章26節「預言者たちも共に辱めを受ける」名詞 הַמָּה מְלִכֵיהֶם וְהַרְשָׁהֶם, וְהַנְבִיאִים וְהַבְּיָאִיהֶם ([ギ]2章26節も同様 αὐτοὶ καὶ οἱ βασιλεῖς αὐτῶν καὶ οἱ ἄρχοντες αὐτῶν καὶ οἱ ἱερεῖς αὐτῶν καὶ οἱ προφήται αὐτῶν)「彼らの王たち・彼らの高官たち・彼らの祭司たち・彼らの預言者たち」
- 4章9節「預言者はひるみ」名詞 וְהַנְבִיאִים, וְהַמְהִי ([ギ]4章9節も同様 οἱ προφήται θαυμάσονται)「王・高官たち・祭司たち・預言者たち」(2章26節で非難される身分階級と同じ)
- 5章13節「預言者たちはむなしく (=風のように) なり、言葉は実現しない」名詞 וְהַנְבִיאִים יְהִיוּ לְרוּחַ

- ([ギ]5章13節「われらの預言者はむなしくなる」 οἱ προφῆται ἡμῶν ἦσαν εἰς ἄνεμον)
- 5章31節「預言者たちは偽りの預言をし」名詞・動詞 הַנְּבִיאִים נְבִיאֵי בַשָּׁקֶר (2章8節の表現とよく似ている。バール→偽り) ([ギ]5章31節も同様 οἱ προφῆται προφητεύουσιν ἄδικα) 「預言者たち・祭司たち」
- 6章13節「預言者から祭司に至るまで皆、欺く」名詞 (単数) וּמְנַבְיָא, וְעַד-כֹּהֵן כָּל־עֹשֵׂה שִׁקְרָא (* [ギ]6章13節「祭司から偽りの預言者に至るまで皆、偽りを行う」 ἀπὸ ἱερέως καὶ ἕως ψευδοπροφήτου πάντες ἐποίησαν ψευδῆ) 「預言者・祭司」 *14節・15節「彼らは、わが民の破滅を手軽に治療して、平和がないのに、『平和、平和』と言う」
- 8章1節「～の骨、預言者たちの骨が、墓から、掘りだされる」 וַיֵּצֵאוּ... וְאֵת עַצְמוֹת הַנְּבִיאִים... מִקְבְּרֵיהֶם ...ἐξοίσουσιν...καὶ τὰ ὀστά τῶν προφητῶν...ἐκ τῶν τάφων αὐτῶν) 「ユダの王たち・高官たち・祭司たち・預言者たち」
- 8章10節「預言者から祭司に至るまで皆、欺く」名詞 (単数) וּמְנַבְיָא, וְעַד-כֹּהֵן כָּל־עֹשֵׂה שִׁקְרָא (6章13節、14節、15節と基本的には同様) (*[ギ]は8章10節後半の「身分の低い者から高い者に至るまで」から12節までを欠く。従って、ヘブライ語のこのテキストに対応する箇所を持たない)
- 13章13節「すべての王たち、祭司たち、預言者たち、及びエルサレムのすべての住民」名詞 וְאֵת-הַמְּלָכִים הַיְשָׁבִים לְדָוִד עַל-כִּסְאוֹ וְאֵת-הַכֹּהֲנִים וְאֵת-הַנְּבִיאִים וְאֵת-כָּל-יְשִׁבֵי יְרוּשָׁלַם—שְׂכָרָן (「ギ」 καὶ τοὺς βασιλεῖς αὐτῶν τοὺς καθημένους υἱοὺς Δαυὶδ ἐπὶ θρόνου αὐτοῦ καὶ τοὺς ἱερεῖς καὶ τοὺς προφήτας καὶ τὸν Ἰουδαν καὶ πάντας τοὺς κατοικοῦντας Ἱερουσαλημ μεθύοματι) 「王たち・祭司たち・預言者たち・エルサレムの全ての住民」
- 14章13節「見よ、預言者たちは彼らに向かって言う」名詞 הִנֵּה הַנְּבִיאִים אֹמְרִים לָהֶם (平和の預言が続く) (「ギ」14章13節 ἰδοὺ οἱ προφῆται αὐτῶν προφητεύουσιν)
- 14節「預言者たちは、わたしの名において偽りの預言をしている」
名詞・動詞 שִׁקְרָא הַנְּבִיאִים נְבִיאֵי בַשָּׁמַי (「ギ」14章14節 Ψευδῆ οἱ προφῆται προφητεύουσιν ἐπὶ τῷ ὀνόματί μου)
- 14節「彼らは(預言者たち)お前たちに預言している」
代名詞・動詞 הֵמָּה, מְתַנְּבְּאִים לָכֶם ([ギ]14章14節 αὐτοὶ προφητεύουσιν ὑμῖν)
- 15節「それゆえ、わたしの名によって偽りを預言している主は預言者たちについてこう言われる」名詞・動詞 לֵן כֹּה-אָמַר יְהוָה, עַל-הַנְּבִיאִים הַנְּבִיאִים בַּשָּׁמַי [ギ]14章15節 Ψευδῆ οἱ προφῆται προφητεύουσιν ἐπὶ τῷ ὀνόματί μου)
「預言者たちが剣と飢饉によって滅びる」名詞 בְּחֶרֶב וּבְרָעַב יָתוּמוּ, הַנְּבִיאִים הֵמָּה ([ギ]14章15節 Ἐν θανάτῳ νοσερῶ ἀποθανοῦνται, καὶ ἐν λιμῶ συντελεσθήσονται οἱ προφῆται) (*但し、ギリシャ語の翻訳は「預言者たちは病(?)で死に(「死を死に)、飢饉で死ぬ」)
- 16節「彼らは預言を聞かせている」動詞 הֵמָּה נְבִיאִים לָהֶם ([ギ]14章16節 αὐτοὶ προφητεύουσιν αὐτοῖς)
- 18節「預言者も祭司も見知らぬ地にさまよって行く」
名詞 (単数) כִּי-גַם-נְבִיאֵי גַם-כֹּהֵן וְאֵל-אֲרָץ ([ギ]14章18節 ὅτι ἱερεὺς καὶ προφήτης ἐπορεύθησαν εἰς γῆν, ἣν οὐκ ᾔδεισαν)
- 16章の表題「預言者の孤独」は原文になし
- 18章18節「預言者から御言葉が失われることはない」名詞 (単数) כִּי לֹא-תֵאבֹד ... וְדָבַר מְנַבְיָא ([ギ]18章18節 ὅτι οὐκ ἀπολείται...καὶ λόγος ἀπὸ προφήτου)
- 20章6節「お前も、お前の偽りの預言を聞いた親しい者らも共に」動詞 וְשָׂם תְּקַבֵּר--אֶתְּהָ וְכָל-אֶהְבִּיָּהּ, וְשָׂם תְּקַבֵּר--אֶתְּהָ וְכָל-אֶהְבִּיָּהּ, וְשָׂם תְּקַבֵּר--אֶתְּהָ וְכָל-אֶהְבִּיָּהּ [ギ]20章6節 σὺ καὶ πάντες οἱ φίλοι σου, οἷς ἐπροφήτευσας αὐτοῖς ψευδῆ)、
- 23章9節に付された表題「預言者に対する言葉」は原文になし
「預言者たちについて」名詞 לְנְבִיאִים ([ギ]23章9節 Ἐν τοῖς προφήταις)
- 11節「預言者も祭司も汚れ」名詞 (単数) כִּי-גַם-נְבִיאֵי גַם-כֹּהֵן, חִנְפוּ ([ギ]23章11節 ὅτι ἱερεὺς καὶ προφήτης ἐμολύνθησαν)
- 13節「わたしは、サマリアの預言者たちにあるまじき行いを見た」名詞 וּבְנִבְיָאֵי שְׁמָרוֹן, רָאִיתִי תַפְלָה ([ギ]23章13節)
- 13節「彼らはバールによって預言し」動詞 הַנְּבִיאֵי בַבְּעַל ([ギ]23章13節 ἐπροφήτευσαν διὰ τῆς Βααλ)
- 14節「わたしは、エルサレムの預言者たちの間におぞましいことを見た」名詞 וּבְנִבְיָאֵי יְרוּשָׁלַם

- רְאִיתִי שְׁעָרָהּ (〔ギ〕23 章 14 節 καὶ ἐν τοῖς προφήταις Ἰερουσαλημ ἐώρακα φρικτά)
- 15 節 「それゆえ、万軍の主は預言者たちについてこう言われる」名詞 לִּן כֹּהֵן אֲמַר יְהוָה צְבָאוֹת, עַל-הַנְּבִיאִים (〔ギ〕23 章 15 節 διὰ τοῦτο τάδε λέγει κύριος.... *ギリシャ語訳には「預言者たち」という訳語なし)
「エルサレムの預言者たちから」名詞 מֵאֵת נְבִיאֵי יְרוּשָׁלַם (〔ギ〕23 章 15 節 ἀπὸ τῶν προφητῶν Ἰερουσαλημ)
- 16 節 「お前たちに預言する預言者たちの言葉を聞いてはならない」名詞・動詞 לֹא-תִשְׁמָעוּ (〔ギ〕23 章 16 節 Μὴ ἀκούετε τοὺς λόγους τῶν προφητῶν)
- 21 節 「わたしが遣わさない預言者たちは走る」名詞 לֹא-יָלִצְוּ אֶת-הַנְּבִיאִים, וְהָם רָצוּ (〔ギ〕23 章 21 節 οὐκ ἀπέστειλλον τοὺς προφήτας, καὶ αὐτοὶ ἔτρεχον)
「彼らは預言する」動詞 וְהָם נְבִאוּ (〔ギ〕23 章 21 節 καὶ αὐτοὶ ἐπροφήτευσον)
- 25 節 「わたしは、わが名によって偽りを預言する預言者たち...聞いた」
名詞・動詞 שָׁמַעְתִּי, אֶת אִשׁ-שָׁקֶר (〔ギ〕23 章 25 節 ἤκουσα ἃ λαλοῦσιν οἱ προφῆται, ἃ προφητεύουσιν ἐπὶ τῷ ὀνόματί μου ψευδῆ)
- 26 節 「預言者たちは偽りを預言し」名詞・動詞 הַנְּבִיאִים--נְבִיאֵי שָׁקֶר [〔ギ〕23 章 26 節 τῶν προφητῶν τῶν προφητευόντων ψευδῆ)
「彼らは心の欺くままに預言する」名詞 (但し動詞的に翻訳) וְנְבִיאֵי, תַרְמַת לִבָּם (〔ギ〕23 章 26 節 καὶ ἐν τῷ προφητεύειν αὐτοὺς τὰ θελήματα καρδίας αὐτῶν)
- 28 節 「夢を見た預言者は夢を解き」名詞 (単数) הַנְּבִיאֵי אִשׁ-שָׁקֶר אֵתוּ, הַלִּזְמוֹת, וְהֵם יָסְרוּ, הַלִּזְמוֹת (〔ギ〕23 章 28 節 ὁ προφήτης, ἐν ᾧ τὸ ἐνύπνιον ἔστιν, διηγήσασθω τὸ ἐνύπνιον αὐτοῦ)
- 30 節 「わたしは、仲間同士でわたしの言葉を盗み合う預言者たちに立ち向かう」
名詞 עַל-הַנְּבִיאִים
וְהֵם יִשְׁתַּחֲוּוּ, אִישׁ מֵאֵת רֵעֵהוּ, מִגִּבְרֵי דְבָרֵי, אִישׁ מֵאֵת רֵעֵהוּ [〔ギ〕23 章 30 節 πρὸς τοὺς προφήτας...τοὺς κλέπτοντας τοὺς λόγους μου ἕκαστος παρὰ τοῦ πλησίον αὐτοῦ)
- 31 節 「預言者たちに立ち向かう」名詞 הַנְּבִיאִים עַל-הַנְּבִיאִים (〔ギ〕23 章 31 節 ἐγὼ πρὸς τοὺς προφήτας)
- 32 節 「見よ、わたしは、偽りの夢を預言する者たちに立ち向かう」名詞 (但し動詞的に翻訳) הַנְּבִיאִים הַלִּזְמוֹת שָׁקֶר (〔ギ〕23 章 32 節 ἰδοὺ ἐγὼ πρὸς τοὺς προφήτας τοὺς προφητεύοντας ἐνύπνια ψευδῆ)
- 33 節 「預言者であれ祭司であれ」名詞 (単数) או-הַנְּבִיאִים או-כהן (〔ギ〕23 章 33 節 ἢ ἱερεὺς ἢ προφήτης)
- 34 節 「預言者にせよ、祭司にせよ、民にせよ」名詞 (単数) וְהַנְּבִיאִים וְהַכֹּהֵן וְהָעָם (〔ギ〕23 章 34 節 καὶ ὁ προφήτης καὶ ὁ ἱερεὺς καὶ ὁ λαός)
- 37 節 「預言者にはただ...と言うがよい」名詞 (単数) כֹּה תֹאמַר, אֶל-הַנְּבִיאִים (〔ギ〕23 章 37 節 *この節のギリシャ語はただ以下の短い文章のみで、「預言者」という言葉は見られず、直訳すれば、「このゆえに、われらの神なる主は語られる」。καὶ διὰ τί ἐλάλησεν κύριος ὁ θεὸς ἡμῶν またその前節の 36 節のギリシャ語は καὶ Δῆμμα κυρίου μὴ ὀνομάζετε ἔτι, ὅτι τὸ λῆμμα τῷ ἀνθρώπῳ ἔσται ὁ λόγος αὐτοῦ で、「主の託宣だということを更に (=二度と) 言ってはならない。なぜなら、託宣とは彼ら (自ら) の言葉だからである」との意味で、ヘブライ語の「生ける神であるわれらの神、万軍の主の言葉を曲げたからだ」はギリシャ語にない。)

*エレミヤ書 25 章 13 節までは、ヘブライ語聖書 (マソラ・テキスト Masora text) とギリシャ語テキスト (セプトゥアジント Septuaginta) は構成の上で共通する。しかし 25 章 14 節から以後、両者はその構成を著しく異にすることになる。以下 52 章までの多くを省略

26 章 7.8.9 節
29 章 14.15.16 節

「預言者」・「預言する」という言葉に肯定的な表現

- 1 章 5 節 「母の胎から生まれる前にわたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた」名詞 וְיִבְרָכְךָ מֵרַחֵם מְרַחֵם מִרְחָם הַיְהוָה, וְיִשְׁתַּחֲוּוּ לְךָ, נְבִיאִים לְגוֹיִם, יְהוָה יִתֵּן [〔ギ〕1 章 5 節も同様 καὶ πρὸ τοῦ σε ἐξελεῖν ἐκ μητρὸς ἡγιακά σε προφήτην εἰς ἔθνη τέθεικά σε.)
- 11 章 21 節 「アナトトの人々はあなたの命をねらい、『主の名によって預言するな...』と言う」

動詞 על-אָנָשִׁי עָנִיתוֹת, הַמְבַקְשִׁים אֶת-נַפְשִׁי, לֵאמֹר: לֹא תִנְבֵּא בְּשֵׁם יְהוָה ([ギ]11章21節 ἐπὶ τοὺς ἄνδρας Αναθῶθ τοὺς ζητοῦντας τὴν ψυχὴν μου τοὺς λέγοντας Οὐ μὴ προφητεύσης ἐπὶ τῷ ὀνόματι κυρίου)

19章14節「エレミヤは、主が預言させるために遣わされたトフェトから帰って来て」動詞 אָנָשִׁי לְהַנְבִּיא יְהוָה שָׁמַע (エレミヤの発話を『預言する』という動詞で記述する。エレミヤの預言者化か? 11章21節とも同レベル) ([ギ]19章14節 οὐ ἀπέστειλεν αὐτὸν κύριος ἐκεῖ τοῦ προφητεύσαι)

20章1節「イメルの子パシュフルは、エレミヤが預言しているこれらの言葉を聞いた」動詞 וַיִּשְׁמַע בְּנֵי יְהוָה אֶת-דְּבָרֵי יְהוָה, נְבִיא אֶת-דְּבָרֵי הָאֱלֹהִים... פָּשְׁחוּר בֶּן-אֲמֵר הַכֹּהֵן ([ギ]20章1節 Καὶ ἤκουσεν Πασχωρ υἱὸς Ἐμμηρ ὁ ἱερεὺς... τοῦ Ἰερεμίου προφητεύοντος τοὺς λόγους τούτους)

20章2節「パシュフルは預言者エレミヤを打たせ」名詞(1章5節と同レベル) וַיִּכֶּה פָּשְׁחוּר, אֶת יְרֵמְיָהוּ, הַנְּבִיא ([ギ]20章2節 καὶ ἐπάταξεν αὐτὸν *ギリシャ語には「預言者エレミヤ」という固有名詞はなく、パシエルの名もない)

25章2節「預言者エレミヤは...次のように語った」名詞 אָנָשִׁי דְבַר יְרֵמְיָהוּ הַנְּבִיא ([ギ]25章2節 καὶ ἐπάταξεν αὐτὸν)

25章4節「主の僕である預言者たちを倦むことなく遣わした」名詞 וַיִּשְׁלַח יְהוָה אֱלֹהֵינוּ אֶת-כָּל-עַבְדָּיו הַנְּבִיאִים ([ギ]25章4節 καὶ ἀπέστειλλον πρὸς ὑμᾶς τοὺς δούλους μου τοὺς προφήτας ὄρθρου ἀποστέλλων)

13節「エレミヤがこれらすべての国々について預言し、この巻物に記されていることを、すべて実現させる」動詞 אָנָשִׁי-נְבִיא יְרֵמְיָהוּ עַל-כָּל-הַגּוֹיִם ([ギ]25章13節 καὶ ἐπάξω ἐπὶ τὴν γῆν ἐκείνην πάντας τοὺς λόγους μου) ことでのギリシャ語は「預言する」という動詞ではなく、「もたらす」という意味の ἐπάξω (= ε π α γ ω) を使っている)

*このエレミヤ書25章13節までは、ヘブライ語聖書(マソラ・テキスト Masora text) とギリシャ語テキスト(セプトゥアジント Septuaginta) は構成の上で共通する。しかし25章14節から以後両者はその構成を著しく異にすることになる。

26章5節「わたしの僕である預言者たちの言葉に聞き従わないならば」

47章1節「預言者エレミヤ」([ギ]29章1節には欠如。但し The Complutensian Polyglot には見られる)

- 本日の講義では、エレミヤ書1-25章13節までのヘブライ語とギリシャ語の簡単な比較を素描することしか出来なかったが、エレミヤ書のこの最初の部分を見ただけでも、「預言者」という言葉の使い方が変化していったことが見て取れる。すなわち、エレミヤ自身は「預言者」を非難し、非難したエレミヤの言葉が「預言」に値する確かな言葉であったかどうか、すなわち「真の預言者」に相応しいものであったかどうか、そして正しかったと判断されたとき、エレミヤに「真の預言者である」という意味で「預言者エレミヤ」というタイトルが付与されることになった。そうした珍しい変化の事例をエレミヤ書はわれわれに手教している。因みに、「預言者 X」というタイトルを付与されている預言書の預言者はハバクク、ハガイ、ゼカリヤの三名である。ハバククの活動は捕囚前に見られることが多いが、ハガイ、ゼカリヤはアケメネス朝のペルシャ時代であり、ハバククを含め、「預言者」というタイトルが新たな意味を獲得して、すなわち正典化された文書の預言書のタイトルとして、あらためて「預言者」という意味を獲得したことの結果であろうと考えられる。
- また、一部ではあるが、ヘブライ語のエレミヤ書とギリシャ語のエレミヤ書を比較すると、ヘブライ語のエレミヤ書は冗長であり、ギリシャ語のエレミヤ書が簡潔であることが窺い知れる。本日は、その点を十分に示すことが出来なかったが、ヘブライ語とギリシャ語のそれぞれのエレミヤ書を比較すると、ギリシャ語はおよそ「七分の一」短いことが知られている。
- 預言者が非難される時、一つは「バアルによって預言する」ことであり、一つは「偽りを預言する」ことである。前者はイスラエル宗教史は唯一神教ではないことを語っている。他方、「偽りを予言する」とはやや抽象的だが、14章などを参照すると、それが「平和の預言」であることが分かる。
- 5章13節のように、「預言者」(複数形) が単独で非難の対象になる場合もあるが、その他多くは「王」・「高官」・「祭司」・「律法を教える人たち」、「指導者たち」と並んで非難される。こ

- のことは、「預言者」という職業(?)が当時(バビロン捕囚直前)エルサレム・ユダの社会の中で一定の地歩を占めていたことを示唆すると同時に、5章31節の「預言者たち・祭司たち」という語順を別にしても、「預言者たち」がいつも最後に言及されるということは、これら身分階級の中では、彼らの位置が相対的に低かったことを物語る。
- 26章5節の「わたしの僕である預言者たち」という表現に見られるように、「預言者」という言葉に肯定的な意味合いを付与している段階がエレミヤ書の生成プロセスの中に見て取れるが、ここで使われている「預言者」という言葉がなおも「折衷的」(eclectic)であることは、続く26章5節以下の「預言者」という言葉を祭司と共に批判的に用いていることから窺い知れる。
 - 27章で見られる「偽りの預言をしている」という非難は、エレミヤの時代に始まった預言に関する認識ではないであろうが、バビロン捕囚を契機として、「国家存亡」の危機に際して、預言者とその預言はこれに対応できるのか、あるいは事後預言(post eventus)として、これに対応できたのか、という問題意識がその背後に潜んでいると見てよい。
 - 27章と深く関係するが、28章は職業預言者と思われる預言者ハナンヤとエレミヤとの対決の記事である。この記事は、前597年のバビロン第一次捕囚の後の出来事をあつかっていると思われる。興味深いのは、ここでエレミヤは「預言者エレミヤ」と描写され「預言者ハナンヤ」と共に「預言者」というタイトルを冠せられている点である。エレミヤが職業預言者でなかったことは明らかであるが、ここで「預言者エレミヤ」と記述される背景には真の預言者は誰か、あるいは真の預言者は誰だったかという問題意識がこの記事の起草の背景に潜んでおり、旧約聖書正典化のプロセスに於ける「預言者」の位置を示唆する重要な証言の一端と解せる。
 - 14章から見えてくるのは、なぜエレミヤ書において「(職業)預言者」が非難されるかという点と、彼らは時代を洞察することにおいて、結果的に「平和の預言者」(魂の配慮)であった点にある。国家存亡の危機において、平和を語ることは、そのエルサレム、ユダの聴衆に安心感を与えたことであろうし、このこと自体、エレミヤ書が言うように、必ずしも「偽りの預言」であったかどうか判断の難しい所である。仮に、ユダの捕囚がなく、エレミヤの時代以降国家が存続したとしたら、「平和の預言者」は「真の預言者」でもあり得たはずである。しかし、ユダの命運は結果として国家崩壊を迎えるのであり、エレミヤの「災禍告知」とその行動は正当性を獲得することになる。ここに至って、「真の預言(者)」は「災禍預言(者)」であるという歴史理解が一定の地歩を獲得したことになる。
 - エレミヤの発話行為を「預言する」という例が19章14節や20章1節に見られる。これはエレミヤを預言者化する記述であり「真の預言者は誰か」・「偽りの預言者は誰か」という記述と文書化の段階としては同レベル・同時代と見なすことが出来る。